

# 《2010年10月例会報告》

【日 時】2010年10月27日(水) 19:00~21:10 (その後「ルン」~0:00頃)

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室 (東京都文京区大塚 1-9-1)

【演 者】高崎康嗣 (川崎フロンターレ U-12 監督)

【テーマ】世界は楽しい!ーダノンカップ 2010 南アフリカ大会 U-12 報告

【参加者(会員)10名】安藤裕一(インターナショナル SOS) 牛木素吉郎(ビバ!サッカー研究会)  
北原由(青梅 FC) 国島栄市(ビバ!サッカー研究会) 幸野健一(三幸企画) 嶋崎雅規(帝京  
高校) 高田敏志(町田高ヶ坂 SC コーチ) 田中俊也(三日市整形外科) 田村修一(フリーラ  
ンス・ジャーナリスト) 中塚義実(筑波大学附属高校)

【参加者(未会員)4名】栗田大士・蓑方直輝(アミティエ・スポーツクラブ) 古賀康彦(早稲田  
大学大学院スポーツ科学研究科/都立石神井高校サッカー部) 佐藤創(中央大学サッカー部コー  
チ)

【報告書作成者】中塚義実 預

注1) ★は初参加のため参加費無料

注2) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくま  
でもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定する  
ものではありません。

\*\*\*\*\*

## 世界は楽しい!

### ーダノンカップ 2010 南アフリカ大会 U-12 報告ー

高崎康嗣 (川崎フロンターレ U-12 監督)

\*\*\*\*\*

#### <目 次>

##### 第Ⅰ部. プレゼンテーション

1. はじめに
2. ダノンネーションズカップ (DNC) とは?
3. DNC プロジェクトの目的・基本理念
4. 大会の概要
5. ピッチ外の活動
6. 抽選会~競技会の様子
7. 質疑応答①
8. 世界との差
9. 質疑応答②
10. 今後の課題

##### 第Ⅱ部. ディスカッション

1. みて、判断して、表現する
2. 合宿生活で見える普段の生活
3. 「伸びしろ」をどう伸ばすか?
4. 日本国内のサッカー環境
5. 「世界との差」をどうやって埋めていくか

## 【第 I 部 プレゼンテーション】

### 1. はじめに

川崎フロンターレの U-12 を担当しております高崎と申します。中塚さんとは 12 歳（小 6）からお付き合いさせていただいて、DUO やサロンの方にも参加させていただいています。今回このような機会をいただき、皆さんに還元できるものがあればと思い、受けさせていただきました。

私たちは 2008 年からダノンカップ日本大会を 3 連覇しており、今年で 3 回目の出場になります。昨年はサンパウロで開催の予定でしたが、インフルエンザの影響で中止となり、今年度は 2009 年、2010 年大会が同時に開催されました。世界 40 カ国が参加する大会を経験してきて、少しでも皆さんに今の世界の現状をお伝えできればと思っております。

実は先週、この発表をクラブ（川崎フロンターレ）でする予定だったのですが急遽延期となり、今回が初めてになってしまいました。本来は順序が逆なので、クラブの方から怒られるかもしれません。今週金曜日に発表予定なので、広めるのは少しお待ちいただきたい、と思います（笑）。

### 2. ダノンネーションズカップ（DNC）とは？

これから、ダノンの話をしていくわけですが、ダノンをご存じない方はいらっしゃいますか？

ダノンとは、ヨーグルトや日本でなじみの深いボルビック（ミネラルウォーター）、そのほか医薬品等を製造販売している多国籍食品メーカーです。今回、世界 40 カ国が招待されているのですが、各国から南アフリカ・プレトリアまでの渡航費等は全てダノングループの負担です。僕らのチームで言いますと、600～800 万円位を全てダノングループが負担してくれました。今回の参加国の中では日本が一番遠いそうです。

「世界は楽しい～」

これは僕の感想です。本当に世界は楽しい！ 世界がないとおもしろくないな、と実感しています。行くと、「このまま帰りたくない！」「このままヨーロッパ回って勉強したいな！」という思いにかられます。

ダノングループとは、前述した通りのメーカーです。ダノンカップとは、10 才から 12 才の子供達を集めて 2000 年より開催され、今年で 11 回目となります。2007 年より 40 カ国になり、全世界 250 万人の子供達が予選に参加しています。



▶ダノンネーションズカップとは？  
ダノングループは 10才から 12才の少年少女のサッカーの国際大会であるダノンネーションズカップを、2000年以來毎年開催しています。  
2007年からは世界各地から40カ国が大会に参加し、これまで250万人の児童にこのすばらしいイベントに参加するチャンスを提供してきました。

参加可能な子どもたちの年齢は、10歳から11歳とされており、男女とも参加できます。

**DANONE NATIONS CUP**

### 3. DNC プロジェクトの目的・基本理念

FIFA 公認の大会に参加し、また教育的にもしっかりしており、競争心・チームワークという部分も含めた人間形成に力を注いでいます。2008 年大会に強豪国・カメルーンが参加していたのですが、ピ

ザの関係で遅刻して参加できませんでした。そのため今年の 2009 年、2010 年大会には出場できませんでした。いい加減な国は参加させない、というダノグループの強い信念がうかがえます。強いというだけでなく、生活面をきちんとするんだ、ということが強調されています。

世界大会ですが、参加チームは、日本チームと同じように単独チームが参加しています。各国の予選を勝ち抜いた 1 チームがその国の代表ということです。全世界 110,000 以上の学校、65,000 以上のクラブが参加し、ジネディーヌ・ジダン選手がアドバイザーとなって、当大会の収益は ELA（欧州ロイコジストロフィー協会）に全て寄付されます。

最終日、決勝戦はオーランドスタジアムで行われましたが、観客一人あたり、日本円で約 1,000 円の入場料を徴収します。40,000 人分のチケットが完売されており、その収益全てが ELA に寄付されています。

## 4. 大会の概要

### 1) 参加国

会場・参加 40 カ国は資料をご参照下さい。

### 2) ルール

9 人制、ハーフタイムなしの 20 分 1 本ゲームです。予選は 40 カ国を 8 グループに分け、1 日で予選リーグが終了します。予選ゲームは 15 分 1 本で行い、決勝トーナメントに入ってから 20 分 1 本のゲームになります。決勝戦は 10 分間の前半後半ですが、お国柄か、多少いい加減なところもあり、ランニングタイムだけで 20 分流れてハーフタイムがない、という状況でした。ルールも

**プロジェクトの目的?**

ユニークなプロジェクト  
 各国のサッカー協会や教育管轄省庁に承認された競技で選出された(1998/1999年生まれの)選手たちが、本年の国際大会に参加します。これらのサッカー選手たちは、ワールドカップに替って開催される、FIFA公認の大会に参加し才能を発揮することができるのです。

**DANONE NATIONS CUP**

**DNCの4つの価値、基本理念**

Operate オープンであること  
 Pleasure of the game ゲームを楽しむ  
 Fair-Play フェアプレー  
 Acceptability & Graciousness ちか・定やす

DNCの価値観に基づきルールは、競技開始前のテリコカルミーティングで、コーチによりサインされます。

子どもたちに、サッカーを楽しんでもらい、夢を信じてもらう

**DANONE NATIONS CUP**

会場:	OLANDO STADIUM (ヨハネスブルグ) 決勝ステージ UNIVERSITY OF PRETORIA (プレトリア) 予選リーグ
参加国:	アルジェリア・アルゼンチン・オーストラリア・オーストリア・ハンガリー・ラディッシュ・ベルギー・ブラジル・ブルガリア・カナダ・中国・チリ・チェコ・エジプト・イングランド・フランス・ドイツ・ハイチ・インドネシア・アイルランド・イタリア・日本・リビア・メキシコ・モロッコ・モザンビーク・オランダ・ニュージーランド・ポーランド・ポルトガル・ルーマニア・ロシア・南アフリカ・韓国・スペイン・チュニジア・ウクライナ・ウルグアイ・USA
参加資格:	1998年1月1日~1999年12月31日の間に生まれた少年少女
大会ルール:	◇9人制 ◇ハーフタイムなしの20分 ※決勝戦は10分間の前半と後半とする。 ◇ピッチサイズ: 68m×50m (公式サイズの半分) ※このルールは、フランスサッカー協会 (FFF)、国際サッカー連盟 (FIFA) より承認されています。
試合方式:	出場 40 チームがリーグ戦を行い、各 8 組上位 2 チームが決勝トーナメントに進出。

そんなに厳しくないので結構サッカーをさせてくれます。ピッチサイズは 68m×50m、正規サイズの半分ですが、実際会場を見た感じでは、おそらく 60m×45m 位だったと思います。2009 年大会の U-13 になると体が大きくなっている分、パワープレーの応酬となっていました。

### 3) 競技会方式と日程

試合方式は、5 チーム×8 グループのリーグ戦により上位 2 チームが決勝トーナメント進出します。下位の 3 チームも順位トーナメントがあり、1 位～40 位まで全ての順位が決まります。

30 日より公式練習が始まるため、日本チームは 29 日に現地入りしました。29 日は 7:00 に空港到着後、時差ボケを調節するために、大学構内で遊んだりトレーニングをして寝たという感じです。翌日はプレトリア動物園（南アフリカで最大？）への観光、そして公式練習をして抽選会。

オーランドスタジアムを使った理由ですが、約 20 年前のアパルトヘイト廃止時に、マンデラ大統領がこのスタジアムで解放宣言をしたそうです。そういった歴史的な背景を踏まえて、このスタジアムを使おうということになったと聞いています。

最後、ピッチの横にいたジダンと記念撮影しました。

### 4) 結果

成績は、U-13 が 4 位、U-12 がベスト 8 で敗退し、順位決定戦で 5 位という結果でした。

これが、日本 U-12 の戦績です。5 位というのは、U-12 では過去最高の成績です。成績の詳細は別紙にお配りしていますが、U-12 は、

- 1 位 メキシコ
- 2 位 ウルグアイ
- 3 位 ブラジル
- 4 位 フランス

という結果でした。

実は、評価をしていたこともあり、身長 140cm と、小柄ながら栗脇くんがベストプレイヤーに選ばれました（写真中央）。これは、ベスト GK、ベスト DF、ベストアタッカー、MVP、そしてベストプレイヤーとして世界 40 カ国の中より 5 名が選ばれます。その中の一人に選ばれたということです。大会得点王は韓国の大東少年団の選手。ヨーロッパ



より誘いがある程、技能の高い選手です。残念ながら、チームは決勝トーナメントに進むことはできませんでした。後に大会関係者より、日本チームを大変高く評価していただいていた、と聞きました。



## 5. ピッチ外の活動

### 1) 国際交流

大会期間中の交流として、選手にはこのようなハンドブック(画像は2008年度版)が配られます。挨拶や、「今日勝った?」という簡単な言葉が記されており、各国の選手と交流が図られるようになっています。中には、なんて書いてあるのか読めない言葉もありますが、その時はその国の選手のところに行って、「これ何て読むの?」と交流するわけです。

### 2) 宿舎での生活

宿舎は、郊外にあるプレトリア大学の寮です。藁葺き屋根に壁は漆喰、蛍光灯は2本で窓は1カ所のみ。エアコンなしの8人部屋で、床は砂まみれでした。テレビもなければ電気も冷蔵庫もない環境ですが、選手はそんなこと全く関係なく、楽しそうに生活できていました。この敷地内に16カ国が宿泊していました。ちなみにスタッフはもう少し設備のいい部屋に泊まることができました。

### 3) 食事

食事はバイキング形式、右下は朝食風景です。日本の子どもはよく食べるので、栄養面ではとてもいいと感じられます。他国はオレンジジュースに砂糖を沢山入れたのを飲んで終わり、というところもありました。逆に、フランスの選手などは、朝からしっかりと食事を摂っていましたね。

もしかすると数年後に、日本の食事摂取状況の良さがいい方向に影響するかもしれません。ヨーロッパ諸国のいい加減な食事を見ていると、今後、体格の差は変わらないかもしれませんが、サッカーで勝負になるかもしれないな、と思って見ていました。

ドイツの友人に聞いた話ですが、最近の選(U-10)は、よく風邪を引いて練習を休むそうです。よくよく聞くと、その選手は非常に過保護で甘やかしすぎて、食事でもキチンとしたものを食べさせてい



### 宿舎



### 食事



ない。日本の選手はそういった生活面で非常に優れていると言っていました。もしかしたら、このような面で勝つチャンスがあるかもしれません。

## 6. 抽選会～競技会の様子

高崎：抽選会の様子ですが、ステージ上で抽選が行われます（日本は第1シードでした）。ステージ上では常にショーが行われていて、選手たちはいつでもここに来て、踊ったりしながらリフレッシュできる環境になっていました。

中塚：これは、全部プレトリア大学の敷地内ですか？

高崎：はい、全部プレトリア大学の敷地内です。とにかく広く、筑波大学の2つ分くらいの広さはあると思います。

牛木：アフリカ最大の大学だと言っていましたね。

高崎：とにかく、どこまで行っても大学、という印象です。筑波大学も広い印象でしたが、それよりもはるかに広いですね。

試合後に世界各国の選手同士でアクティビティを行いました。ブーツダンスやペイント（壺に）。試合後～食事にかけての活動ですが、選手は疲れているにも関わらず、結構楽しんで活動していました。

予選会場と決勝会場です。予選前はこのような並んで試合会場に入り、終わると並んで退場します（写真左下、セネガル）。この繰り返しで、ピッチの中に入って待機するのではなく、簡単に中に入ることができず、ウォーミングアップが始まる5分前位でないとピッチには入場できません。

オーランドスタジアムの様子です。左上の写真のように、周囲にはチケットを持たない黒人達を取り囲んで「何かくれ！」と





声をかけていました。このあたりで、危ない国なのかな、という印象を初めて受けました。

実際、ブブゼラってすごいですね。アナウンサーが「鳴らせ〜！」とあおって、観客が一斉に吹き始めます。そうすると何も聞こえない。近くまで来て始めて聞こえる状況です。最終日はほとんど何も聞こえない状況にもかかわらず、選手たちはしっかりプレーをしてくれました。身振り手振りで伝えるしかありませんでしたが、本当にすごい選手たちです。来年度からのダノンカップ日本大会は、北澤さんの会社が仕切ることになっています。今年は視察も兼ねて来られていました。来年の会場はマドリードで行われます。



## 7. 質疑応答①

中塚：ここままで質問ありますか？

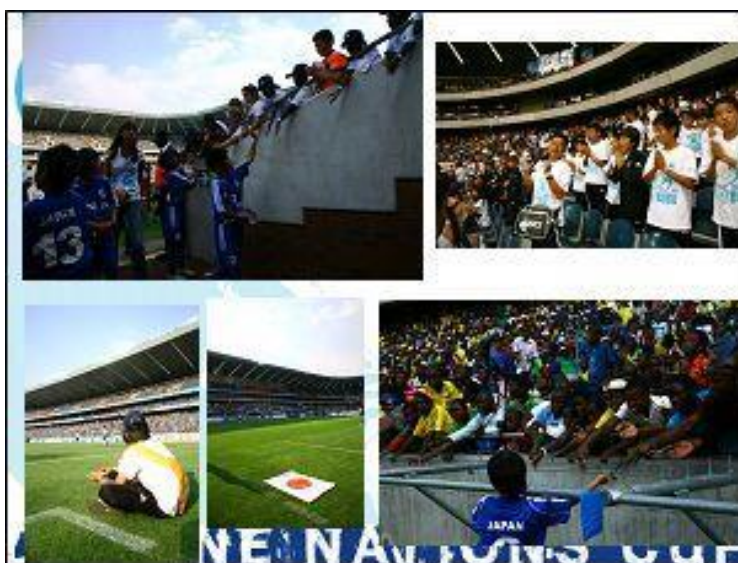
参加者：オーランドスタジアムはヨハネスブルグですよね。エリスバーグはラグビー専用ですが、ここもラグビー専用ですか？

高崎：いえ、サッカー場です。

参加者：ワールドカップでは使っていないですよね？

高崎：使ってないです。日本の親善試合で使いました。

中塚：オーランドパイレーツのホームグラウンドですよね。



高崎：実際はバスで移動しているのでわからなくて、地理堪がつかめず、またバスの前後は警察がいて、常に警護されながら、言われるままに移動していたため、土地堪がまったくわかりませんでした。

参加者：7万人規模のスタジアムに4万人（実際は2万人弱らしい）の入場ということですよね？

高崎：はい。あとで映像をお見せしますが、試合によって観客数は大きく変動していました。

中塚：試合のつくりのようですが、U-13の大会は、本来2009年に行われるべきものだったのが、イ

ンフルエンザの影響でできなかったので、2010年大会でU-12と同時にいった。つまり、本来は1カテゴリーだけで行くとこを、今回は2カテゴリーを1カ所で行った、ということですか？

高崎：はい、そうです。本来は、もう少し充実した大会になるところなのですが、今回は2カテゴリーを同時にいったため、少し慌ただしかったかな、という感じです。パリ大会の方が「サッカーをしているな」という実感は強かったように思います。

参加者：ベストプレーヤーを獲得した栗脇君ですが、小学6年生で身長140cmというと小柄な方だと思うのですが、高崎さんからみて、選ばれたポイントはどこだとお考えですか？

高崎：これから映像を見ながらお話しさせていただくことに含まれるかもしれませんが、チームでは、狭いピッチの中でボールを蹴って、体の大きな外国人を相手にどこまでゴールを目指して入っていくかということに大事にしています。サッカーはゴールを決めなければいけません。ではゴールを決めるためにはどうすればよいか？ 相手が大きいからといってサイドに逃げることはしたくない。大きい選手の間立つこと（相手と相手の中間のポジショニング）、その中で前を向いてボールをゴールまで運んでいくこと、そして少しのスキも逃さないでゴールを目指すことを指導しています。栗脇君はそのキーマンでした。背番号10で1トップの1列下にいたため、そこでボールを受けて局面を作ってくれていたという印象です。これから映像を見てもらいますが、日本チームのボールがよく動いていました。ここからは、映像を見ていただきながらお話しさせていただきます。

## 8. 世界との差

### 1) 2008年大会で感じた「世界との差」

高崎：2008年大会との差から説明させていただきます。

2008年大会に参加した時は、明らかにサッカーを「知っている」or「知らない」の差がはっきりと現れました。日本人はただ入ってゲームをした、ゴールゲームをしているのか、ボールを扱っているのかで違いすぎます。ヨーロッパ諸国をはじめとする世界の子供たちは、普通にサッカーをします。ゴールを守るため、ゴールを決めるためにどこが危ないか、どこがチャンスなのかを感じながらプレーしているところが明らかな違いでしたし、僕自身の認識も甘かったと、改めて感じました。他国は、相手や環境によって戦い方を変えてきます。2008年大会で、日本が前線からボールを奪いに行ったところ、ロングボール主体のフィジカル重視のサッカーで局面を変えられたことがありました。パス主体でつないでいたチームが、3分後にはロングボール主体に変えてくるのです。要は、自分たちのストロングポイントを出してきて、日本の弱点をついてきます。たった20分のゲームの中でプレーを変えることができるチームは、日本ではほとんどありません。それをいとも簡単にやってしまいます。

その後、日本に戻って取り組んだことは、相手との間合いの取り方を変えることでした。間合いはほぼ0に近いと言っていいと思います。守備の間合いが近いと、技術（かわす、パス）が強調されます。正直、日本のサッカーはどの年代もゆるいと思います。Jリーグを見ていると、止まってしまっていますが、世界では止まることはありません。思い切り突っ込み、思い切りぶつかるイメージがあるので、このようなところを強調して取り組んでいました。

また、ゴールへの意識を強くして、スキあらばゴールをねらうよう、強調してきました。

それと攻守の切り替えの早さです。このようなことを2008年大会で感じ、2年間でトレーニングに落とし込んでいきました。



フィジカル差はどうしようもないので、この差を埋めるのは無理。では何を変えようかとなったときに、ポジショニング、つまり立ち位置（相手と相手の間）などを変えてみる。守備ができれば、攻撃時の相手との距離を一気に変えてみる、ということの主眼に置きました。これは、攻撃時に、相手と接触しないで（ぶつからないで）ボールを動かし、ゴールを目指すことにつながっています。サッカーをやる上ではゴールを強調しながら、GK に同時にアプローチをかけて、ゴール前の攻防を多くしたトレーニングを取り入れました。その中で、ギリギリのシュートを打たせない、ギリギリまで寄せきるという練習をして今大会に臨みました。

## 2) 「世界との差」をどう埋めてきたかー川崎フロンターレ U-12 の取り組み

高崎：以下のことを実践してきました。

- ・サッカーの本質を知る
- ・切り替えを早くする
- ・守備の間合いを詰めて、奪いきって攻撃がどれだけできるか  
守備ができればいいのではなく、正面から向かってぶつかって入れ替わり、入れ替わった後のパス、ドリブル、シュートまで強調してきました。ここは攻守の切り替えの早さにつながりますが、早く切り替えることができていました。おそらく、今大会では他のどのチームよりも日本チームは早い方ではなかったかと思います。
- ・前への意識  
ゴールへ向かう中で、狭い中でもボールを持って進入する、また動きでも入っていけるようにすることです。ボール1個分のコースがあれば、おそらく日本人の方が早く抜けることができます。
- ・インサイドパスとコントロール  
日本チームは中盤でのミスが多いという印象を受けました。フランス人のデュソーさんと話をしている、「どうして日本人はこれが下手なんだ？」と言っていました。日本に帰っても、「インサイドとは何？」という基本、コントロールもパスも基本なのに、いい加減にしている。これにはこだわり、今も継続中ですが、とことんトレーニングしています。10年継続してようやく身に付くかな、と思っているくらいです。
- ・ボールの持ち方、触り方  
改めて強調し、取り組んでいます。持ち方ということ色々あるでしょうが、僕は利き足でどれだけボールを持てるかだと思っています。コントロールしたときに利き足の前に常にボールがない奴はダメだと思っています。利き足の前にどれだけボールを置けるか。左利きは左前にボールを自然と置いているというのはご存じだと思いますが、では右利きの選手が左前にボールを置いていいのか、というとそれは間違いであり、右前に置くことが正解です。バルセロナのシャビなどを見れば一目瞭然です。彼らは左足の前にボールを置くことはほぼありません。だからボールを失わないし、あのようなプレーができるのです。触り方も、選手たちには、ボールを足の1カ所、アウトサイドで運ぶなら足の小指の付け根を、インサイドなら足の親指の付け根を触りなさい。そこからの微調整は自分の感覚なので個人差があるから、君たちがするんだ。ただその1カ所を意識して触るんだよ、ということ、ボールの持ち方を含めて指導してきました。そうするとインサイドパスも、どうすれば強く蹴れるかと考えるときに、場所が1カ所に落ち着き、またコントロールも1カ所についてきます。そうすると、単純な二人組のパスが非常に楽しく思えてくるのです。現在も、チームの基本は、以上のようにトレーニングしています。

## 3) 川崎フロンターレ U-12 の成果

高崎：映像を見ていただこうと思います。

- ・U-12のキャプテンは非常に技術が高い（ちなみにハーフ）

- ・対イングランド戦。切り替えの早さで初ゴール
- ・ゴールの大きさは幅 6m（日本の少年は 5m）×2.15m
- ・ゴールの大きさが GK の育成にもつながっている
- ・動きの連動もできていたし、ゴールによって初戦の硬さが一気に抜けた
- ・ボールを奪った後、正面からぶつかっていくプレーができていた
- ・相手に守備をさせないというコンセプトがあり、フィジカルを埋めるために、ぶつからないことが大前提
- ・ルールの違いがあり、ペナルティエリアがタッチラインからタッチラインまでとなっている。ゴールラインから 13m 地点にラインがあり、その幅がタッチラインいっぱい
- ・ボールを失わないでつなげて広い方へ
- ・ボールを奪った後もぶつからないように
- ・サイドからの攻撃を構築しているわけではなく、あくまで中を、どのように攻略していくか、ゴールへ近づけるかということを中心としている
- ・対ウクライナ戦。狭い中で前を向くという意識は高い
- ・1m 程度の間を抜けていくのが日本チームの特徴
- ・ロングスロー 1 本でも、誰もがゴールを目指して入ってくる意識を持っている
- ・対アメリカ戦は、勝利で決勝進出が決まるゲーム。そんなゲームで先制点を取り、前を向いて攻撃していくことができていた
- ・他国は切り返しの中で進入してこられるのが苦手
- ・他国は、身体を寄せにくるチャンスを逃さないように、ミスをねらっている。
- ・背番号 10 の選手（ベストプレイヤー）は、やはりゲームをうまく作っていた
- ・守備が良かったせいか、GK（キャプテン）はほとんど目立たなかった
- ・相手を吹っ飛ばすほどのぶつかりができていた
- ・スキあらば、正面からぶつかってボールを奪い返す
- ・交代は自由。ルール上はフットサルに近い
- ・PK 戦は 3 人制。蹴った選手はピッチより出される（不正を防ぐため）
- ・オランダスタジアムのゲームでは、指示の声は一切聞こえない（ブブゼラによる）ため、選手自身で判断をしていた（アイコンタクトのみ）
- ・フランスチームは、日本チームより圧倒的に切り返し早い！ 体格の差（180cm 近い↑）。Gk も、シュートを前で前で止めようとする
- ・表彰式は親の方が喜んでいる！
- ・メキシコ代表はプロのパチューカの下部組織。技術的には飛び抜けていた。体格も大きい。

## 9. 質疑応答②

中塚：川崎フロンターレがこの大会へ出場するための予選は、「ダノンカップ予選」としてやっているのですか？

高崎：はい、日本大会は 3 月末に、3 日間の日程で行われます。

中塚：ピッチサイズ、ゴールサイズとも、本大会と同じですか？

高崎：ヴェルディのグラウンドを使って、同じサイズで行います。予選 4 チーム×8 リーグを 15 分で行

い、決勝トーナメントのみ 15 分ハーフで行います。

中塚：昔から「ダノンカップ」と言っていた？

高崎：「ダノンカップ」もしくは「ヴェルディカップ」と言っていました。

参加者：元々は「ヴェルディカップ」と言っていて、J クラブの何チームかと東京の地域選抜が出ていました。その名残として、いまも東京都のブロック選抜と J クラブが混ざって予選リーグをやっています。

高崎：東京都の 16 ブロックと J クラブの 16 チームが参加しています。

参加者：ここ数年、「どうして東京だけが出られるのか！」という声が上がっています。ブロック選抜が出られなくなると言われながら、来年も出場できるようです。いつかはなくなるでしょうが。

高崎：実は来年度は予選形式が変わって、関東・東海・関西の 3 ブロックで予備予選を行い、12 チームを選抜するそうです。東京都 (J クラブ含む) と併せて 20 チームで日本の本大会を開くそうです。

中塚：日本サッカー協会とはどのような関係なのですか？

高崎：協会は今までノータッチでしたが、来年度からは協力してもらおうという話になっています。世界につながる大会なので、少しはクローズアップしてもいいのではないかと、という意見です。

参加者：日本大会もダノングループが全ての経費を負担してくれているのですか？

高崎：全てダノングループが負担して、ヴェルディのグラウンドを借りてくれています。

参加者：予選方式の変更は、来年、再来年と言っていましたけど…

高崎：おそらく、2011 年のスペイン大会に向けての予選はこのような形になります（注：ここで説明があったが本報告には記載せず）。

今回の成果としては、ゴールへの進入、ボール 1 個分のスペースでも前へ進入していく、相手の背後へ動ききる、攻守の切り替えの早さ、スキを逃さない、相手に守備をさせないボールポジション、寄せてくる相手にぶつからないでボールを寄せていく、そのためには連動した動きや立ち位置が大事になってきます。それから守備の間合いです。日本のボールへの寄せの方が速かったという印象はあります。そして、ボールを奪った後の攻撃です。

## 10. 今後の課題

高崎：課題といっても、これまで実践してきたことは間違いではなかったということが正直な実感なので、攻守に、今まで以上に精度を上げていくことかと思います。より速く、より強く、そしてよりサッカーを知らないと無理です。残念ながら他国のチームは、上手下手は関係なく、サッカーが成り立っています。技術はないし遅いかもしれない。でも、サッカーをしている違和感はないので



す。ただシュートを打たれることもなく、寄せきっています。日本人は、ただ下がるだけで打たれることがあります。しかし彼らはそんなことはありません。危ないと思えば寄せてきますし、チャンスだと思えば動き出します。そこがミスで終わることもありますが、ゴールへという判断には、ほぼ合っていたようにみえました。ドリブルもパスも混在する中でプレーしていることがよくわかります。このようなところをもっと精度を上げていく必要があると、改めて思っています。

GK の役割は重要です。日本人と世界各国の GK の差は明らかに大きいと思います。他国選手は、サイズがある上に、アタックするタイミングを逃していません。フィールドでも同じことが言えますが、失敗をおそれないことが重要です。

以上です。

## 【第Ⅱ部 ディスカッション】

### 1. みて、判断して、表現する

参加者：先ほどの映像ですが、小さなピッチに9人入って、すごくコンパクトな状況ですが、受ける前に動くときの見る判断がすごくいいです。背負っているときでも、キョロキョロする時と手で確認するときと、腕の使い方など、日本チームは他国とは違うなど、見ただけで思ったのですが、そのあたりで細かく指導されているところはあるのですか？

高崎：見なければ判断は始まらないと思っています。見るから何かがわかる。もしくは、見えなくても自分の感覚があるからそこに立っていられる。五感、六感を含めた部分は重要だと思っています。課題の一つになるのですが、「感情表現」も大事です。世界の子どもたちは、「やった～！」と、ワンプレーに喜ぶし、失敗すると地面を叩いて悔しがります。ブラジルの選手は、予選で引き分けたことに対して号泣し、選手同士で怒鳴りあって怒っているわけです。感情表現の「悔しい」「嬉しい」「楽しい」は、次の試合につながると思います。

最終的には「よし、もっとやってやろう！」と思うから、どうやってやっつけようかと思って見いだす。「悔しい！こいつには負けない！」と思うから、相手のスキを逃さないように見ることができます。寄せて背負って取られたなら、触るというのも「悔しかった」とか「うまくいった」という感情が表に出て、そのようなプレーにつながっています。

日本の選手は残念ながら、予選でウクライナに負けたときは何も表現できませんでした。負けても悔しいのか悔しくないのか、選手自身が困惑していました。ウジウジしていたので思い切り頭を…すると全員が泣き始めました。そして楽になったのか、そこから意見を言い出し、最後は自分たちで「やるしかないじゃん！」と。僕は何も言っていません。彼らの個性がそれぞれ出てきました。でも、海外の選手たちは、そんなことはなく自然にできています。感情を表現するから、勝手に、見て判断することにつながりますし、それが日本の選手であれば、あのようなギャップに立とうという判断をする、それも手探りです。

この、感情表現を思い切り出した前後の試合を比べてみると、同じ相手の対アメリカ戦では、予選と5位決定戦とは全く違っていました。本人たちに聞いても、おそらく少し立ち位置を変えていると思います。そのくらいの感覚で、一生懸命やっていたのだらうと思います。見る習慣や、厳しい中でのプレーは、日本での練習で取り込んでいます。

火曜と金曜の練習は同じ仲間ですが、火曜のコンディションと金曜のコンディションが同じではありません、ですので当然練習の感覚は違ったものになるはずですが、それをどう感じてプレ

一するかということを強調しています。そうでなければ「またお前か…」となめてしまい、感覚は磨かれませんか。本当の一瞬のスキというのは映像ではわからないですし、フランスチームやその他のチームが本当に速かったというの、映像ではうまく出ていませんでした。選手たちが肌で感じたのは、そのあたりの差や、表現の差でした。それを感じた選手たちが後輩に伝え、また僕自身も色々な場所でこのような話をさせてもらいたいと思っています。

中塚：今の感情表現の話はすごくおもしろいですね。「悔しい」とか「うまく行って嬉しい」ということを、思っていないわけではないのに表現できない。しかしその感情は、何かきっかけがあると表に出て、そこから自分たちでグイグイやれるようなことも出てくる。「きっかけ」はどのように与え、あるいは見つけさせてやればよいとお考えですか。

高崎：この大会自体が、宿舎も含めてサッカーに集中できる環境にあります。日本から I-phone を持ってきていたりしていましたが、8 人いるからお互いに話をして、それらを誰も使いません。だから、こちらがスイッチ一つ入れてやることで自然とできていました。

2 年前も、予選で失敗した後に選手が勝手に変わりました。「どうするんだ、このままでいいのか？」と聞けば、キャプテンがチームを変えることができるのです。何人かが本気で胸ぐらをつかんで怒りあい、お互いにすっきりして次の試合に臨んでいました。今回の子どもたちは、残念ながらそれができないし、やろうとしません。どちらかという、大人の目を盗んでコソコソする子が多かったので、そのたびに怒られるわけです。コソコソしていることはすぐにプレーに出るので、指導者としてはそれを見逃さないようにしながら、「堂々とやれ」と言い続けてきました。残念ながら、日本に戻ってしばらくすると、元の日本の環境に戻ってしまいました。

こういう映像を見せてきっかけを作ると、その後の練習は盛り上がっています。

## 2. 合宿生活で見える普段の生活

参加者：南アフリカに滞在したのは 5 日間？ 7 日間？

高崎：都合、8 日間滞在しました。

参加者：食事風景を見ても、全ての国と一緒にとっている様子ですが、朝食も一緒ですか？

高崎：そうです、指導者も子どもたちも全て一緒です。

参加者：国内でこんなに長い期間一緒に過ごすことはありますか？

高崎：合宿で 2 泊 3 日位です。

参加者：その時と今回とは、朝のバイキングの食事量などで違いはありますか？ それともいつも通りまんべんなく食べられていましたか？

高崎：基本は「食べさせる」のですが、今回はあまり言わなくても食べていました。

参加者：すばらしいですね！

高崎：頑張っているな、と感じました。決まった時間内で食べきらないといけないので。

参加者：むしろ、外国の選手の方が摂れてないな、という感じですか？

高崎：外国の選手はひどかったですね。

参加者：逆だと思っていました。プロ選手の春のキャンプの様子を栄養士さんが撮った写真を見たことがあるのですが、元日本代表であってもユースあがりの選手でも、朝食をみてすぐにダメだとわかります。12才くらいから知識として、朝からバランスよく食べるということを親が教えていかないと、プロでは淘汰されてダメになるし、プロに行くことも難しいし上達もしません。だからこのチームはすばらしいと思います。12才くらいの子はできていないのかなと思ってビデオを見ていましたが、きちんとバランスよくとれていますね。これなら未来も明るいと感じました。

高崎：この環境にいるとそれができますが、家ではどうかかわからないですよ。親次第です。親が甘やかしていたり…

参加者：チームで栄養士さんがアドバイスをしたりしているのですか？

高崎：毎年シーズン前に講習会を行っています。さらに僕の方からも、ことあるごとに、しっかり食べさせてください、食べてますか、と言っています。その上で、量的にも質的にも足りないことを伝えながらも、お菓子は極力控えてもらっています。遠征に行ってお弁当が足りないときにコンビニに行くことがありますが、お菓子やジュースを選ぶ子はほとんどいなくなりました。これが中学・高校になると、お小遣いを持ったりして変わってくるのが事実です。日本の学校教育自体が、小学校から中学校に行くときに人数が増えます。母集団が100人から200人になったとき、じゃあ200人のうち正しい食生活が送れている子がどのくらいいるかと言えば、ほぼいないと思います。友達に誘われると大半が誘いに乗ってしまう。それで崩れていく子が実際に多いと思います。律している子はいるのですが、そういう子は学校の中で浮いてしまいます。でも、そういう中でも守れる子でないと、この世界で活躍して日の丸を背負っていく人間にはなれないと感じています。それをミーティングの度に、彼らには映像を踏まえながら伝えており、その影響も出てきていると思います。

### 3. 「伸びしろ」をどう伸ばすか？

牛木：生活態度とは別に、映像を見て、日本の子どもたちが技術的・戦術的に完成されているという印象を持ったのですが、将来、この子どもたちはもっと飛躍的に伸びていくのか？ 完成されすぎているという感じがしましたが、そのあたりはどうですか？

高崎：サッカーは大人も子どもも関係ないと思っています。子どもがやることも大人がやることも同じサッカーです。なので、変わらないと思います。12才の時に中塚さんと知り合って、「絶対勝ってやるんだ！」と無謀に挑戦して、一緒にサッカーをしていました。ストリートサッカーと同じだと思っています。それに、まだこの選手たちは全く完成していません。できているように見えますが、これからはどんどんフィジカルやスピードが変わります。それぞれの子どもたちが、毎月身長が1~2cm伸びているから、ボールの感覚も全部変わってきます。



牛木：古くから言われている話なのですが、小中学校の時に日本の子どもたちがヨーロッパ等に行って試合をして勝つのですが、その後は伸びない。大人になったときにプロフェッショナルレベルではかなり大きな差がついている、そのようなことはこの子たちにはないのでしょうか？

高崎：それはわかりません。ただこれらのことを僕が教え込んだ訳ではなく、「何をやれば楽しいのか？」というところから入りましたし、「どうやってゴールを奪うのか？」ということをしているだけです。それがたまたま、彼らがチームのトップ選手のプレーをみて真似た、コンビプレーを覚えたのかもしれませんが。しかし不満はたくさんあります。もっとできる、と思うことを、今つついています。「ボール1つパスが通るなら、お前一人ドリブルで入れないか？」とか、「もっと楽しいことないの？」「もっと自分たちを高められるプレーはないのか？」という問いかけは常に行っています。それが、ある年代で上に通用しなくなるというのが多いのは、習慣が途絶えるからだと思います。ジュニアでやってきたことが、中学に入ると変わってきてしまう、もしくは年代で区切って見ってしまうことが多いですか？ 12才はこう、13才はこう、14、15でこう、高校・大学でこう、という考え方。そうではないと思います。同じサッカーをやっているのです。さっきの例に示したインサイドパスとコントロールは、永遠にやっていかないと。12才の彼らが10年かけて22才。大学卒業の時に「どうですか？」「いけるんじゃないの？」となるかもしれない。大学の選手も同じじゃないですか？ 大学生でどうしてこんなこともできないの、ということがありませんか？

参加者：スルーパスはほとんど浮いてしまいます。

高崎：でもそれは、「オレ、できるよ」と言って、してこなかった結果だと思っています。僕は10年かけて習慣は身に付くと思っているので、選手にも「10年間やり続けてくれ」と言っています。当然、その10年間に、身長の変化により全然違った世界が見えてきます。フランスチームに、「この選手たちは来年残るかな？」と聞くと、「半分残るかな」という回答でした。彼らは毎年、上に上がれるのは約半分なのです。フランスは特に、INFのアカデミーに入れて、そこからプロにスカウトされます。他国の選手は、1年ごとの更新になっています。厳しい環境の中で、毎年勝負を試されています。では日本は？ うちのチームで考えると、3年間は絶対所属できます。大学生も、頑張れば1年から4年まで所属することができます。しかしヨーロッパの選手たちは、1年ごとに勝負をかけて、ダメなら淘汰されていってしまう。一生懸命やっている選手しか残れないのです。それは、食事にも練習にも、全てに当てはまります。先ほど言いましたが、黒人の、特に移民の選手は、食事をしっかり摂る。彼らに余裕はありません。ドイツの指導者に聞くと、残っていくのは移民の選手が多いそうです。これらの選手が死ぬ気で一生懸命やって、ここで何とかしたいと強く思い、それがずっとつながって強くなっていくのです。ドイツはこういった移民の選手が多く、U17、U19、U21のヨーロッパチャンピオンを取ったという結果につながっていくのではないのでしょうか。日本は、上に上がれば上がるほど、厳しいというイメージがなくなってきます。

#### 4. 日本国内のサッカー環境

参加者：この選手達は11、12才でフロンターレのジュニアユースに所属して、学校はみんなバラバラなのですか？

高崎：この6年生14人のうち、現時点でフロンターレのU-13に内定しているのは8人です。おっし

やるように、学校も皆バラバラです。

参加者：部活に行ってしまう選手もいるのですか？

高崎：クラブですね、部活に入る子はほとんどいません。

参加者：昔、小6ですごく上手で、選抜でもエースと言われている選手がいました。当時から清水では草サッカーをよくやっていて、その子たちと高校生が試合をやると、高校生も手を抜きませんから、高校生の蹴ったボールが小学生の顔面に当たってしまう。そのような中で、彼は高校生を相手に1対1をやっていました。それが長谷川健太なのですが、後日談で、「あの時風間さんに思い切り蹴られて、小学6年生は天狗になっていたけど、キョショウ（清水市立商業高校・当時）にはこんなすごい人もいます。自分たちは、同世代ではチャンピオンだけど、上には上がいるんだということ、小学6年生の時に知っていた。だから上を目指さないといけないし、全国大会で優勝しても全然満足できなかった」と言っていました。こういうことを経験した選手は、12歳でユースの高校生チームに入ることがどんどん増えていくのではないのでしょうか？ そのような優秀な選手は、高校生の試合に出て、中学生の試合には出ない方がいいのではないかと思うのですが…

高崎：メディアのとらえ方も非常に大きいです。全日本少年大会も出場させてもらいましたが、これで満足してしまうのではないかというくらいのお祭り騒ぎです。清水はスペシャルクラスを始めましたよね。そこも手を抜かないですよ。僕も小学生の頃、中塚さんに手を抜かれていたら挑戦しなかったと思います。手を抜かないから、下は必死になります。上も、抜かれたら立場がなくなってから必死です。このような延長がサッカーを作っているのかな、と思います。諸外国では当たり前なのではないでしょうか。それでも昨今、他国も過保護が増えて…と言っていますが。日本は逆に、世界の選手よりも過保護ではないのかもしれませんが。大会中のことですが、大会前にスタッフから「水は貴重に使ってくれ」と言われていたにもかかわらず、ダノグループがたくさん提供してくれて、たくさんあるから他国の子どもたちは一口飲むと捨てる位、粗末に扱っていました。それを平気でしているのです。この状況を見ていると、日本が浮上するきっかけがあるかもしれないと思いました。それがいま、この選手たちかもしれないし、先ほどおっしゃられたような、中学生が高校生大会でデビューできるような選手たちかもしれません。ただ、このようなポジションを取っている選手は、なかなか見つけにくいかもしれません。たとえば本田や森本はわかりやすいと思います。じゃあ遠藤や中村憲剛などは…。おそらくそんなに高くは評価されないでしょう。でも、オシムに「お前すごいな！」と言われて憲剛は浮上してきました。日本のサッカーを見る目も少し変わっていかないと、このような選手たちが伸びていかないのではないのでしょうか。結構おもしろい選手はたくさんいますが、考えてポジションを取る選手は、おとなしい選手が多いです。そのような選手たちを見ていくとおもしろいとは思っているのですが…。感情表現が備わってくると、一皮でも二皮でも剥けていきそうな気がします。僕自身がトレセンやジュニアに関わっていますので、このように持論ですが、お話しさせていただいています。

牛木：たとえば森本とか本田のような選手でないと今の協会のような考え方では出てこない、という意味ですか？

高崎：どちらかという、前にいてぶつかり合うところでボールを持っている選手はわかりやすいと思います。しかし、ボールをもらう前に勝負をかけている選手もたくさんいます。森本や本田のように強い選手（もちろん強さだけではないですが）は、今の日本にとってすごく大事です。でも、

そうではない選手も大事に扱っていくことで、日本はもっと変わるのではないかということです。

牛木：憲剛や遠藤のような選手は拾い出してでも育てていかないといけないということですか？

高崎：そのような気がします。それが、クラブが担っているのか、サッカー指導者が担っているのかわからないですが、皆が同じでは困りますし、強い選手、速い選手も絶対に必要です。でも考える選手、本当に考えてプレーできる選手をどうやって習慣づけるかというところに、僕は特化しています。これで大きく、速く、強くなればもうけものだね、といつも言っています。考えて強いプレーができれば、それはそれでいいよね、と。でも、考える習慣はこの年代から身につけないと難しいと感じています。もしかしたらその年代は、精神的に10才以下かもしれません。世界と日本では学校教育が違いますから、考え方も違ってきます。そこから考えると、日本は10才位から習慣づけていくのがいいのかもしれませんが。強いところでは9才からということもありますので。

## 5. 「世界との差」をどうやって埋めていくか

参加者：世界でサッカーを知っているか知っていないかの差がある、とのことですが、チームでそれを埋めるために、子どもたちに特に意識していることはありますか？

高崎：一つは、守備面で厳しくということは意識しています。とにかくギリギリの間合いの中でどれだけできるか、ということです。その中でどのように感じたか、ということを中心に聞いています。「何を考えて、どうしたかったのか」「いま、どの感覚だったのか」「自分の気持ちが必要な感じになっていたか」ということです。たとえば「怖かった」「かわせそうだった」。その部分に気づくことはすごく大事で、「怖い」と思っている子に次はありません。だから怖いと思っはいけない。じゃあ、まずそこを変えようか、という話をします。すると、「怖くないよ。この距離大丈夫？ じゃあ次どうする？」「じゃあかわしたい」「かわしたかったら何しようか？ 変えられることって何？」、コントロール、立ち位置、動き、駆け引き…というところにアプローチしていくと、その子たちが「どうしようか？」と考えられるようになります。繰り返し考えられないと「もう帰れ」となっちゃいますが。観た中での感覚の部分に強調していきたい。それが考えることに繋がっていきます。難しいことは何も言いません。サッカーを知ってもらいたいので、最低でも幅や深さは知ってもらいたいです。

あとは、やってはいけないことも言います。たとえば、バウンドさせない、浮いたボールを落とさないということです。サッカーは自由なのですが、やってはいけないことがあります。横パスをインターセプトされてはダメ、自陣では失うなということです。もちろん失敗もありますが、このようなことを強調して伝えています。「自陣のペナルティエリアでドリブルしろ」とは言いません。そのなかで、やってはいけないとわかっているけど、「取られなきゃいいや」という選手がいれば、それはそれで言いますが、それを言われて黙ってしまう選手はダメです。大人は色んなことを言います。その時に自分でどう判断できるのか。「言われてもできないならやめれば？」ということも言います。やってはいけないことの中で、自分がどう判断したかを追求します。

参加者：私もバルセロナで1年間、指導者の勉強をしていたのですが、本当に同じようなことを感じました。勤勉性や人間性の部分で勝負していけるのではないかと、という印象を持ちました。それ以外で決定的に違うと感じたのは、たとえばバルセロナであれば、週末にはバルサが試合をし、それを子どもたちはみんな見に行きます。テレビではチャンピオンズリーグが生中継されています。次



の日には、見てきた選手たちのプレーについて話をしています。この、見る習慣というのが、私の中では大きいと思ったのですが、川崎フロンターレの小学生は、このような、ゲームを見る習慣というのはどの程度あるのでしょうか？

高崎：1・2期生は多いですね。彼らは、トップのグラウンドでやるときはまずトップの練習を見に行きます。その練習が終わる頃にジュニアの練習が始まります。テレビでのチャンピオンズリーグもしっかり見ていて、次の日にやはり同じように話をしていました。今年の選手は、その習慣は少ないですね。そう考えると、1・2期生の選手たちはすごく感受性も高いですね。ヨーロッパは目の前でチャンピオンズリーグが見られますよね。こんなに贅沢な環境はないですね。プレーの激しさもわかっているし、ぶつかって「痛い！」という音も聞こえます。うちのジュニアでもその音が聞けるようになってきたのですが、間近で観たり、聞けば、あ、こうするのだ、と思えますよね。世界各国は1部から4部まで（もっと下のリーグまであるところもありますが）あって、下に行くほど激しくなりますが、日本は逆です。下に行けばミスが多いから激しくなるのが当たり前のはずなのですが、日本ではゆるくなります。それも含めて、伸びていかないのかな、とも思います。いいものが目の前で見られる環境でないと、モノにはならないです。

今回このような大会に出させてもらって、実践の中で経験してわかったようです。くるぶしを削られたり、爪が真っ青になったり…これが普通なんだよ、という話ができただのも良かったと思います。やはり、どこかできっかけが欲しいですね。その環境を、サロンの皆さんも含めて考えてきたことですし、僕らがその伝達する、指導する役割を担っているのだと思っています。

中塚：話は尽きませんが、さまざまな議論のテーマが出てきたと思います。続きは場所を変えて、さらには引き続きいろんな機会にしていきたいですね。U-12に限定するのではなく、また“選手”育成に限定するのでもなく、あらゆる分野での“人材育成”につなげていければと思います。貴重な話をどうもありがとうございました。（拍手）

以上